

第九回日蓮宗化学研究発表大会

特別発表・海外における教化について

平井智親

一、はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました日蓮宗開教布教センターで所長を務めております平井智親でございます。まずはこのような機会を頂戴しましたことに田澤所長・高佐主任を初めとする現代宗教研究所の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、アメリカ・カリフォルニア州のヘイワード市にある日蓮宗開教布教センターからインターネットを通じて皆様にご挨拶を致しております。ここヘイワード市はサンフランシスコ市内から車で約四十分、サンフランシスコ国際空港からは約三十分のところであり、交通の便もよく、比較的安全な住みやすい場所です。千葉県船橋市と姉妹都市提携をしております。時差は十六時間で、現在夜の十一時です。ただ、日付は十月二十七日、日本から見ると昨日のアメリカからお話を致しております。

さて、ここにお集まりの皆様の中には私がおります日蓮宗開教布教センターのことをあまりご存じない方もおられると思いますので、簡単にご説明申し上げます。開教布教センターは、海外における布教活動を後方支援するため一九九一年に設立されました。二〇〇二年に現在地を購入、施設を改装して現在に至っております。活動内

容は、広報・出版・研修を行っており、具体的には機関誌発行、ホームページの維持管理、英訳本の発行、英文パンフレットの発行、教師研修、沙弥研修、信徒研修などを行っております。なぜこのような組織が必要なのかといいますが、海外の寺院は、日本全体と同じかそれ以上の面積の州に一つ、あるいはその国に一つしかないというところが多く、周りに頼るべき人は誰もおりません。組寺など夢のような話です。ですから、開教師は自分が日蓮宗の代表であるという自覚の下、全てを一人で行わなければなりません。しかし、一人の力にはどうしても限界があります。例えば、日常の法務を務めながら本やパンフレットを英訳出版したり、研修会を開催したりすることは、一人の力ではかなり難しいといえます。そのような開教活動の補助を開教布教センターでは行います。例えとしてはよくないかもしれませんが、それ以前は最前線の兵士が自らその場で鉄砲の弾を作っていました。それではあまりに効率が悪いので、前線近くに弾を専門に作る工場を作りましょうといったのが開教布教センターなのです。また、過去先輩方が残された経験や知識の集積を図り、整理し現役開教師に公開することも重要な業務であり、その他、それぞれの得意分野を生かして、開教区の垣根を越えて合同で活動する場を提供することも大切なことです。このように、従来の開教活動ではできなかったことを、より効率化し、効果が上がるように支援するのが開教布教センターの使命であります。このセンターが設立されたことによって始まったのが、注目されているヨーロッパと東南アジアにおける布教です。

私は立正大学での学業を終え、戻って来いという師父を説得して三年間だけという許しをもらい、一九九二年十一月にハワイへ飛びました。三年半をホノルルのハワイ日蓮宗別院でお世話になり、その後マウイ島のプウネネ教会で一年半、イギリスロンドンで二年半、またホノルルに戻り七年、現在の開教布教センターに赴任して二年と少しになります。結果として師父には大嘘を付いたことになりましたが、都合十七年間海外で布教に当たっております。

何故海外に行こうと思ったのかと申しますと、日蓮聖人は、法華経の教えお題目の教えは世界で一番素晴らしい教

えだよと教えられております。それが本当のことなのか、日本だけでなく海外でも通用するものなのかこの目で確かめてみたいと思つたのです。また、海外で勉強したいという気持ちもありました。この二つの理由から海外へ出たのですが、最初の内は本当に大変でした。まず英語が話せませんでしたし、外国人が理解できる教えの説き方がわからなかつたのです。

例えば日蓮聖人の説明をする時に、日本であれば鎌倉時代にお生まれになつたと話を始めますが、これが外国だと鎌倉時代がわかりませんし、日本の歴史もわからないのです。ですから日本の歴史の概略も前提条件として説明しなければなりませんでした。つまり、一を説明するのに、マイナス十から説明を始めなければ理解してもらえないのです。日本では、ローソクや線香をなぜお供えるのか聞いてくる人はいません。知っているのか知らないのかはわかりません。常識として今更聞けないと思つているのか、ただ単にそういうものとも何も考えずに受け入れているのかもありません。しかし外国ではよく聞かれます。本堂に行くときと皆さんの仏具がありますが、その中には金箔をはつたものも多くあります。ある時この仏具は本物の金ですかと聞かれたことがあります。そのようなことを聞かれたことがなかつたのでびっくりしました。もしこれが本物の金ならば、私は持ち逃げし、余生を楽しみますと答えておきました。日本では思いもよらないことを尋ねられることが海外では多くありました。そこでうまく説明をして納得してもらわないと、この教えはわからない、私には信じられないと信徒を失うことにつながります。短絡的反応と思われられるかもしれませんが、文化背景が違う国では他の国の宗教に日常接する機会はあまりありません。ですから、新しく興味を持つてきた人には、まず信仰しなさいと言ふのは難しい話で、思想を理解してもらふこと、つまり往々にして心より頭から入ってくることになります。そのためでしょうか、頭での理解から心での信仰に導くのはなかなか大変です。このような悪戦苦闘の十七年間の結論は、それでもやはりお祖師様は正しかったということでありました。法華経の教えでなければ世の中の人は救われぬ。お題目の教えは世界で一番素晴らしい教えであると私は現在確信して

おります。

## 二、海外布教の現状

皆様は日蓮宗の布教拠点が、現在何ヶ国にあるかご存じでしょうか。答は、十六ヶ国です。十六ヶ国に、四十二の拠点があり、約四十人の海外駐在教師が布教に励んでおります。具体的国名を挙げれば、アメリカ、カナダ、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、イギリス、ドイツ、イタリア、韓国、マレーシア、インドネシア、シンガポール、タイ、インド、スリランカ、ネパールです。私が開教師になった頃は、アメリカ、カナダ、ブラジルぐらいしかありませんでしたので、ここ最近の海外布教の発展は目覚ましいものがあります。

このように発展している海外布教ですが、それに従事する四十という教師の数が多いか少ないのか議論の分かれるところだと思えます。私は正直に申し上げます、かなり少ない数字だと思っております。日蓮宗は伝道宗門を標榜し、教師は一天四海皆帰妙法祖願達成をその使命としております。世界中に布教することを内外に喧伝している日蓮宗には現在約八千三百名の教師がおります。その中で海外で布教する教師は、〇・五パーセント以下となります。これでは祖願達成を真剣に考えているか疑問といわれるかもしれません。夢のようなことを申し上げますが、せめて全教師の一パーセント程度、八十名ぐらいの方が常に海外で布教に従事して頂ければと念願しております。しかし、現実には厳しく、私は海外布教は今絶滅の危機に瀕していると考えております。というのは、日本では少子高齢化が進み、寺離れも顕著と聞いております。今後教師の数が減り、檀徒の数も減り、立ち行かない寺院が増えることとなります。そうなれば、海外に行っている場合ではない、日本のお寺を護れということになるでしょう。日本から教師が海外へ行かなくなれば、現在の海外布教はたちどころに行き詰ります。そのような危機が眼前に迫っています。今から対策を講じておかないと間に合いません。対策として考えられることは、日本人開教師養成システムの充実と、外国人教

師の育成です。これらのことについては、考えていることもいろいろありますが、また別の機会に申し上げたいと思います。

ところで日本においては、開教師は酷い生活をしているらしいと思われていることが多いようです。私もハワイへ出発前に、開教師はすごく貧乏で、一度行くと十年は帰って来られないらしいしぞ等と散々脅かされました。実際に行ってみると、本当に貧乏でびっくりしました。しかも日本では考えられないような危険なことや場所があったりと驚きの連続でした。アメリカの中で最も安全といわれるハワイでさえそうでしたので、それ以外の場所やいわゆる発展途上の国などは一体どのような感じなのだろうと本当に恐ろしいと思いました。しかし、慣れて少しずつ布教のお手伝いができるようになると、自分が僧侶として必要とされている、お題目の教えによって悩み苦しむ人に少しでも安心を与えられるということがわかるようになります。今度は楽しくて仕方がなくなりました。貧乏だけど危険だけれどそれでも充実して楽しい開教というように考えが変わるようになりました。私だけでなく、他にも同じような思いを抱いておられる方が多く、そのためでしょうか、退任帰国される方の多くは、開教が辛くて嫌で日本に帰りたいという理由は少ないようです。ちなみに多くの方が挙げられる退任帰国の理由は、一番は師僧からの命令、二番目は子供の教育問題、三番目は経済的な問題です。

### 三、海外における諸問題

さて、これからお話することは、今後日蓮宗が海外においてより発展すれば、当然予想されることについて思いを巡らし、少しでも困難を避けられるように体制を今のうちから整える、いわば準備についてです。世界宗教としてこれからより発展するためには日蓮宗は何をなすべきかについてお話したいと思います。

このことを考えるきっかけになったのは、昨年キリスト教カトリック教会のロサンゼルス大司教区が、過去に神父

が行った子供に対する性的虐待に関する裁判で、五百八人の原告と総額七百二十六億円を和解金として支払うことで合意したことです。この裁判後八十六件の別の裁判でも和解し、総額百二十五億四千万円を支払うことにもなりました。つまり、カトリック教会は昨年一年間で、少なくとも八十七件の裁判で訴えられ、総額で約八百五十億円の和解金を支払うことに合意したのです。カトリック教会ロサンゼルス大司教区は全米最大の教区ですが、一括で和解金を支払うわけではないにしろ、一体どこにそんな天文学的な資産があるのか空恐ろしい気がしました。しかし、私が一番恐れたのは、宗教団体を訴えようと、お金になるということを知ってしまったことです。神聖で尊敬の対象であった宗教団体が遠慮なく訴えられ、多額の和解金支払に応ずることになるなど一昔前までは想像だにできなかったことでした。これはキリスト教だからとお考えなになるかもしれませんが、実はアメリカでは日系の仏教においても近年裁判が続いております。

例えば、昨年ロサンゼルスにある北米浄土宗別院が裁判で和解しました。報道によれば、北米開教区という形で浄土宗と信徒が人事とお金のことで裁判となり、納めた寄付を返還する名目で宗門側が二千七百万円を支払うことで和解しました。和解金も非常に高額ですが、問題はその裁判費用で、二億一千万円かかったそうです。これは表面上かかった必要経費で、実際の支出はもっと多かったことは想像に難くありません。この問題は紛糾し長期化しましたが、その原因の一つは、平成十八年に発覚した宗務職員による七億四千五百万円もの横領事件で、日本で浄土宗が大混乱に陥っていたことにあります。現在は落ち着きを取り戻したようですが、それでもお金と共にこの事件で失った信用と信頼と信徒を取り戻すのは容易なことではないと思います。

もっと手痛い失態をおかしてしまった宗派もあります。ハワイのある宗派は、その別院を失いました。元々信徒が集まり活動していたものに、日本から教師が来て形を整えていったのがハワイでのその宗派の始まりでした。教団発足の経緯から、信徒には宗内の特定の門流に帰属しているという意識は無く、そのお寺は宗内各門流の総合別院とし

て発展成立していきました。事情通によれば、二〇〇二年の開教一〇〇周年という慶事に、その宗の最も有名な門流が前面に出てきて諸事取り仕切るようになりましたが、先述の通り信徒としては帰属意識はありませんでした。その意識の差が問題を大きくしたそうです。慶讃行事遂行に関して門流と信徒が対立、開教区長が入って折衝しましたが、問題はなかなか解決できませんでした。結局、門流と別院が関係を断つこと、別院は宗派の名称を以降使わないことなどで合意し、双方が訴訟を取り下げたと聞いています。

本裁判にこそなりませんでした。大きな痛手をこうむった宗派もあります。報道によれば、一九九四年日系アメリカ人の女性教師が、セクシャルハラスメントの被害にあったとして男性教師と北米浄土真宗本願寺派教団を相手取り提訴しました。性的な内容を含む数々の電話をかけたために男性教師を、被害を報告したにもかかわらず適切な処置を施さなかったことを理由として教団を訴えたのです。結局、裁判所は、証拠不十分として訴訟を門前払いしました。しかし、教団側は訴訟準備費用として約一千七百万円以上を費やさなければなりません。アメリカにおいてセクハラ裁判はかなり一般的なものですが、もし訴えられると弁護士などその準備費用として現在では約二千八百万円かかるそうです。もちろんこれに、敗訴すれば多額の賠償金を払わなければなりませんし、裁判が長引けばその分費用も莫大なものになります。ここで、裁判のみならず注目すべき点は、教師が教団を訴えたということです。日本では教師が日蓮宗を訴えることは考えにくいかもしれませんが、外国では今後可能性として充分考えられます。

教師と教団の争いというところで言えば、少し状況は違いますが、別の宗派でも係争中のことがあります。敢えて日系のお寺を飛び出し、自分でお寺を作って宗門や日系人の束縛の無い布教を始めた教師が他の宗派にいました。お寺を出たその教師は、一九六一年にサンフランシスコにセンターを設立し势力的な布教に励みました。白人の弟子を後継に指名し、一九七一年に遷化されたそうです。そのセンターは大きく発展し、多くの教師や信徒を教化していきま

した。理想や教化はよかったかもしれませんが、結局後に残された弟子信徒は宗教權威の裏づけの無いまま放り出される結果ともなりました。設立から約五十年後の弟子たちは僧侶としての地位確認を求めて、つまり宗教的權威の裏付けを求めて日本の宗派と交渉を開始したとセンター出身の白人教師から聞きました。

その宗は、各海外開教区独自の訓育による教師養成を認めているそうです。もちろんそこで養成された者は、その開教区の中でのみ教師と認められます。日本では教師とは認められず、住職になることもできません。つまり、その独立団体であるセンターで養成された僧侶は、北米内でさえも教師とは認められません。だから気の毒ではあるけれどもこの交渉は不調に終わると予想されます。単に交渉不調で終わればよいのですが、訴訟に発展する可能性もあります。きつと立派な活動をしているであろうセンターも、やはり長い歴史を持った宗教的權威には最終的にかなわなかったということでありましょうか。

さて、少し話は変わりますが、昨年八月到北京でオリンピックが開催されました。日本選手は素晴らしい活躍をしましたが、期待通りの結果にならなかったものもありました。その内の一つが柔道で、外国人選手の活躍は反対にめざましいものがありました。現在競技人口では、日本よりもフランスの方が多く、外国生まれの技もあるそうです。この柔道で全世界を統括しているのが、国際柔道連盟という組織です。この本部はどこにあるかご存じでしょうか。日本の講道館と思いきやハンガリーにあります。昨年九月に理事の選挙が行われ、当時無敵といわれたあの山下泰裕氏が立候補しましたが落選し、現在日本人は理事に名を連ねていません。思い返せば、伝統的な白だけでなく色つきの柔道着を認めるか否かの議論が沸騰していた頃、白のみという日本の主張は容れられませんでした。国際柔道連盟という組織は、実は欧州柔道連盟が名を変えてできたもので、日本の講道館主導でできたものではありません。後に、日本が加わったということなのです。その結果かもしれませんが、柔道は世界に広まりました。これはスポーツの話ですが、同じ事が日蓮宗に起きたらどのように皆様はお考えになるでしょうか。

ここ最近大相撲で外国人力士に関わる問題が大きく取り上げられています。国技といわれる大相撲は、もはや外国人力士抜きに成立し得ない状況です。しかし、最近の事件を考えると、日本人力士外国人力士を問わず大相撲協会が何かしら考えなければならぬことは等しく皆様お感じのことと思います。

これらのことから訴訟問題と併せて同じように、日蓮宗が海外でもっと発展したらどうなるのだろうか、気をつけておくべきことはないのだろうか、世界宗教としての日蓮宗の将来はどのようなべきなのであるのかなどについてもっと具体的に検討をし、祖願達成のために必要なことを実際に始めるべき時に来ているのではないかと思います。

#### 四、祖願達成に向けて

ところで、日蓮宗の目標は何かと問われれば、先ほど申し上げた通り、皆様異口同音に一天四海皆帰妙法祖願達成とお答えになると思います。全世界に法華経の教えを弘めることは私達日蓮宗教師一人一人の使命であります。では、全世界に法華経の教えが弘まった状態とはどのような状態を言うのでしょうか。どのような状態を指して、祖願が達成されたと考えるべきなのでしょうか。私達の目標の最終的な形は具体的にどのようなものでしょうか。皆様お考えになられたことはおありでしょうか。恥ずかしい話ながら、私は漠然と思ったことしかなく、具体的な形について考えたことはありませんでした。しかし、昨今の日蓮宗の海外布教の進展と宗教関係の裁判などの問題によって、きちんとした目的とそこへの道筋を検討すべきではないかと思うようになりました。明確な目的地が分からなければ、そこに到達することは出来ません。目的地が明確になれば、そこへの道筋も明確になります。そのことをきちんと議論すべきであると考えようになりました。

そこで、本日はその議論のたたき台として、私の考えを少し述べてみたいと思います。内容は、今すぐなすべきこと、出来る限り早く検討すべきこと、そして理想の日蓮宗の将来像についてです。

まず日蓮宗が今なすべき事は、いかに身を守るかを考えることだと思えます。防衛を最初に確立しなければ、次の発展は考えられません。私は昔少し柔道を習ったことがあるのですが、その時最初に習うのは受身、つまりいかに投げられるかであり、投げられた時にいかに怪我を少なくするかという防衛を習うのです。防衛なくして発展はありません。さて具体的に日蓮宗の防衛とは何かといえ、現在の布教拠点の法律対策を進めることです。これは宗門が資金を出してでも、早急に現地弁護士と相談し、対策を講じるべきだと思います。先程幾つか例を述べましたが、アメリカほど裁判の恐いところはなく、他の国ではそれほど気にすることはないかもしれませんが、何にしてもとれる対策は取っておくべきですし、一旦訴えられるとその時点で全てが遅すぎるということになり、莫大な裁判費用が必要になります。ですから、現地法律との整合性を持った布教拠点の規則をきちんと定め、訴えられないよう準備すること、仮に訴えられても何とか裁判費用を捻出できるように保険をかけておくこと、宗門に被害が及ばないようにすることなどが重要となります。

次に出来るだけ早く検討すべきことは、公平性と公開性の問題です。海外でより発展を求める場合、公平性と公開性が必ず求められるようになります。つまり、誰に対しても平等で、誰もが理解できる存在となることです。もちろんそれは規約上のことで、実際の運用とは多少ずれるかもしれませんが、しかし、規約上から差別があると、特に外国人教師はそのようなことに敏感ですから、訴えられることとなります。世界の誰に対しても公平で明確に公開された組織であることが非常に重要となつてきます。これは具体的にどのようなことかといえますと、例えば日蓮宗の最高決議機関は宗会ですが、その宗会議員に海外の教師は投票は出来ても立候補はできません。理由は、選挙区も無く、海外においては住職や担任ではなく、教会主任として任命されるからです。これは、海外では差別と考えられるかもしれません。ですから、例えば、まず担任と任命するようにします。日本の管区同じような開教区というものが現在海外にはハワイ北米南米と三つ置かれておりますが、教会数が一定の数を超えたら開教区にするという設置基準も明

確化させます。宗会議員選挙区設置基準との整合性を取るようにすれば、現状と同じように海外から宗会議員が選出されなくても差別とはなりません。寺院数が規程に足りないから不可ということで公平性と公開性の原則は守られていることになるからです。この他最も極端な例えで言えば、信仰と尊敬憧れの対象である身延山久遠寺の狛座に晋む可能性が教師になれば誰にでも等しく与えられるというようなことです。日蓮宗は世界に対して公平で公開された規則を持ち、またこの規則は、各国の言語に翻訳され、誰にでも入手理解でき、それが適正に執行されていることが誰の目にも判るようにすることが重要です。

次に海外においてなすべきことは、新たに拠点を設立する場合など、必要かつ十分な初期投資が重要だと考えます。これは日蓮宗の経済状態を考えるととても難しいことですが、最初にある程度の予算を割いて、各方面からの寄付も募り特別基金を作り、集中的に投資する必要があると思います。十分なマーケティングを行い、お寺の土地建物なども一括購入します。もちろん投資年限を切ることも重要でしょう。それでうまくいかなければ、全てを処分して撤退する。そのようなことをしないと、やはり新しいところに進出する時には難しいのではないかと思います。というのは、興味を持った人が訪ねてきても、狭いアパートの一室で布教をしていけば、想像と現実のギャップに失望し、とても信仰どころではないと思うのです。やはり信仰心を植え付けるには、自然と頭を下げたくなるような場所を提供するのも必要かと思えます。このように、国内整備と海外政策変更により、日蓮宗発展の準備が整うと考えます。では最終的な理想の形とはどのようなものになるのでしょうか。結論から言えば、私は各国に日蓮宗が設立され、それぞれが修行と布教に精進し、連合体としての世界日蓮宗連盟を形成することだと思っております。その中で日本の日蓮宗は、加盟団体の一つとして存在すれば充分だと私は思っております。

何故そのような形が理想の形になるのかといえば、世界にはいろいろな国があり、人がおり、文化があります。その中で、現在の日本の日蓮宗のあり方が最高の形で、世界に通用する普遍的なものであるとは言い切れないと思うか

らです。当然の事ながら、日本と海外では文化が違います。文化が違うということは同じものを見ても考え方感じ方が違うということです。

例えば、皆様はここで画用紙を渡され、太陽の絵を書いて下さいといわれた時に、どのように書かれますか？多分殆どの方は赤の絵の具で丸く大きな太陽を書かれると思います。アメリカの子供たちも同じように書くと思われませんか。当然だろうとお思いになるでしょう。でも事實は違います。アメリカの子供たちは太陽を書く時に、赤ではなく普通黄色を使います。何かの時に小学校を尋ね、教室で子供たちの絵を見た時に、最初その黄色い丸が何かわかりませんでした。しばらくしてその黄色い丸が太陽だとわかった時かなりショックを受けました。話には聞いていましたが、同じものを見て同じように感じるわけではないことがはっきりわかったからです。

その他に、遠くへ引越しをしなければならない時に飼っていた犬を連れて行くことができない場合皆様ならどうされますか。親戚友人に託すことができないなら多くの日本人は、きつと放すと思います。どこかで誰かに拾われて幸せに生きるのを願ってそうするでしょう。しかし、アメリカ人ならこの場合間違いなく殺します。なぜかといえば、野良犬として惨めに生きるよりも一思いに殺した方がかえって犬のためだと考えるからです。ここで日本人なら、たとえ飼い犬の命であつても人間が勝手に奪うのは許されなしかわいそうだと反論するでしょう。そうすれば、野良犬として生きる方がよほどかわいそうだというアメリカ人の再反論があるでしょう。この議論はこのまま平行線で解決はありませんし、どちらが正しくてどちらが間違っているということもありません。ただ違うのです。同じものを見て同じように感じられないのです。

私はイギリス在住中にヨーロッパ各地を布教で歩いておりましたが、スペインでこのようなことがありました。ある時信者さんに向つて、ひよつとしたら法華経の教えお題目の教えがまだよくわからないかもしれないかもしれません。でもそれではないのです。ちようど、赤ちゃんがお母さんの母乳を何も考えることなくひたすら飲んで大きくなるように、皆さ

んもこの教えを受け入れ信仰して下さい。そうすれば、ご利益もあるでしょうしきつと理解できる時が来るでしょうとお話致しました。そうすると、後である信徒さんが私の所へ来まして、さっきの話は納得できませんということです。というのは、スペインでは悪い人がいると、彼はきつと母親の悪いお乳を飲んだに違いないというのだそうです。これにはびっくりしました。日本ではお母さんのお乳は愛情溢れる素晴らしいものと頭から信じています。疑う人などいないと思います。しかし、そうではない国もあつたのです。やはり人を見て法は説かなければならないと非常に勉強になりました。

このようなことから、海外で布教するには、同じものを理解してもらうのに違う方法をとるしかないということを理解しました。現在の日蓮宗は、日本という文化の中で育ってきたものです。日本人はそのことをあまり意識しないと思いますが、外国人は違います。現在の日蓮宗のあり方がそのままなり海外で受け入れられるとは思えないのです。日蓮聖人は、日蓮宗が大きくなることよりも、法華経の教えお題目の教えが弘まることがお望みであると思っております。日本の日蓮宗とは別の形であってもきちんと教えが伝わるのならば、日蓮聖人はきつとお許しになると信じております。逆に伝え方は多少違う形になつたとしても、正しい教えを伝えることを主眼として精進しなければならぬと思っております。

そのためには、現地出身の教師による布教が不可欠だと思いますし、それにより教義解釈や布教方法が多少違う形になる可能性があることを予め理解容認しておく必要があります。しかしこの場合、現在の日本の日蓮宗がそれを承認することができるでしょうか。応援することができるでしょうか。正直に言えば、私は大変だと思えます。それは、文化の違いというものが想像以上に大きく、乗り越えるには非常に困難なものだからです。日本の日蓮宗が統括団体として全てをコントロールする世界連盟はある意味理想かもしれませんが、しかし、スポーツの世界組織のように、各国毎に独立団体が存在し、それがお互いを尊敬を持って対等と認識し、全体としての世界連盟も組織する形がより現

実的だと考えられます。

ご存じのようにあらゆる組織は権力を持ちます。そして権力の後には必ず権威を求めます。逆にその権威さえきちんと確保できれば、世界中の信徒から尊敬と地位を約束されます。権力を求めすぎるといずれ誰かに奪われます。権力をいつまでも保持しようとして、全世界をコントロールしようとして、日本の日蓮宗が母体だから一番偉い、他の国の日蓮宗はみんないうことを聞けという態度であれば、簡単に世界連盟は崩壊し、感情的反発と共にその教えまで正しく伝わらないという事態になりかねません。ですから、そのような自分たちが本家本元という気持ちは奥底に留めて、日蓮聖人の事跡を守り、伝統的存在としての道を選べば、その重要性は決して変わることはないと考えられます。

またその日本の日蓮宗の宗教権威の中心として、祖山身延山久遠寺をもっと顕彰確立すべきとも考えます。身延山は日蓮聖人のお言葉にその根拠を求められる権威としての存在です。日蓮宗は、時々宗本一致ではないからいろいろ難しいといわれますが、そうであるからこそ大きな発展の可能性があると思っております。というのは、今後海外に より発展を求める場合、先述の通り公平性と公開性が必ず求められるようになります。宗本一体でないからこそ、これ等の原則が適応し易いと考えられます。身延山を中心とした日蓮宗は、誰に対しても公平で明確に公開された組織であることが非常に重要で、象徴天皇のように君臨すれども統治せずという形の権威としての存在が世界の中で一番よいのではと考えています。

理想の形から考えてみると、各国に日蓮宗が組織され、連合体として世界日蓮宗連盟がある。各国日蓮宗の代表者による連盟議会があり、そこが最高決議機関となりますが、その議長など主要幹部は選挙によって選ばれ、日本人である必要はない。しかし、日本日蓮宗の身延山久遠寺は、世界の祖山であり、信仰、尊敬と憧れの対象となる。私は、このような形が、一天四海皆帰妙法の祖願の世界といえるのではないかと思います。

ではその理想をどのように実現させるのかということですが、これは海外の布教拠点をできるだけ早く育てるようシステムを変え、日蓮宗から独立させることです。先程裁判の話を致しましたが、過去の例で考えると、お寺で問題が起きてその延長上で宗門を訴えるものと宗門自体のシステムに不満があつて訴えるものの二つがあるようです。しかしいずれにしろ考えるべきことは、訴えられないようにすることです。そのために最も有効な方法は、宗門と海外拠点の法的関係をなくすことです。つまりは、日蓮宗からの独立です。

これはどういう事かといいますと、海外拠点といろいろな関係があるからこそ、宗門は連鎖的に訴訟の対象になるわけで、それがなくなれば心配は必要なくなります。逆にどのようなところでも、現地信徒はずっと日本からの影響の下にあることを潔しとしません。同じようにいつまでも外国の本部からいろいろいわれて愉快に思う日本人もいないと思います。ですから、訴訟問題や文化の壁を乗り越えるために、結論として物心両面にわたる必要かつ十分な初期投資をすることによって海外拠点が早く独立できるよう支援することが肝要と考えます。

## 五、おわりに

今まで話をまとめますと、まず日蓮宗が海外の法律などを研究し、防御を固めること。その後海外布教をより発展させ、順次独立させていくことが必要になってきます。独立できるように、適当な期間を定めて充分な初期投資を行い、物心両面にわたる支援をする。独立拠点が複数設立できた時点で開教区に昇格させ、開教区の内容が充実した時点で宗会の議席を与えるようにする。教団としての独立が可能になった時点で、完全独立をさせて、連盟の正会員とする。独立後は公平で対等な団体として海外日蓮宗を取り扱う必要があります。そして、日本の日蓮宗は身延山を中心とした権威ある存在として、統治はしないけれど君臨するというのが、一天四海皆帰妙法の実現の仕方ではないかと考えます。

このような理想を実現するために、現在の日蓮宗自身は、まず公平性公開性を実現するため規則及び組織の透明性を高め、世界宗教としての規範となれるよう努力を開始する必要があります。もちろんこのようなことは、一朝一夕にできることではなく、十分な時間をかけて審議検討する必要がありますが、出来るだけ早くなすべきものと考えます。

本日は長時間にわたりご清聴頂き厚く御礼申し上げます。